



なごやっ子 2025



名護屋小学校 学校だより No.7
文責_校長 松岡 竜四郎

せんだんの木 ものがたり

11月の全校朝会で「せんだんの木」についてお話をしました。ずっと昔から名護屋小学校の子どもたちを見守っている木ですが、その歴史については、あまり知られていません。校長室の書棚に「名護屋郷土読本」という古い本を読むと、その歴史について触れてありました。子どもたちにぜひ知ってもらいたいと思い、全校朝会で紹介したところでした。(子どもたちに分かりやすいように一部抜粋したり、表現を変えたりしています。)



ずっと、ずっと昔(今から120年ほど前)でした。それはまだ今のようなよい校舎もなく、生徒もこんなに多くありませんでした。その頃私(せんだんの木)は、城山の南側の静かな小高い丘にくらしていました。

ある日、校長先生(20代 佐藤哲三郎校長先生)の温かい手で、みなさんと同じところにやって來たのです。

それから何年も何年も、幾千の教え子たちをこの門から送り出したことでしょう。雨の日も風の夜も私はじっと毎日この学び舎の庭に立っています。

らんまんと咲き誇った桜の花もやがて散り、山々の若葉が日一日と濃くなるころ、私はようやく芽吹きます。「せんだんは、双葉よりかんばし」と言われますが、本当に萌え出でる若葉の香りに我ながらうっとりします。皆さんのが歌ってくれる校歌の中に、「理想は高しせんだんの、大樹の命身に受けて」の声を聞くとき、私はたまらなくうれしいのです。

ある日のことでした。まだ入学したばかりの1年生の男の子三人が、私の枝や葉を折っているのを先生から見つけられて、「このせんだんの木は、学校の大事な木だから、大切にしなければいけません。」と、親切に教えられていきました。それからは皆の生徒が私を可愛がってくれます。

またある日のことでした。思い出多い学校をめでたく終えて、いよいよ懐かしい母校、懐かしい先生方とお別れする卒業の日でした。「さようなら学校、さようならせんだんの木」と、私に向かってさようならを言ってくれました。私は、6年間も一緒に遊んだこの人たちと別れるのが、どれ程辛かったでしょう。私はいつまでもいつまでも後姿を見送りました。

昔から今まで、私は誰よりも名護屋小学校のことを知っています。今ではたくさんの教え子たちがあちらこちらで働いています。時に帰ってきた時、母校を訪れる人は、私にも声をかけてくれます。

名護屋校(名護屋小学校)とせんだんの木は、いつまでも母校の思い出として皆さん的心の中に残ることだと私は何よりの喜びとしております。

